

わが心の遍歴

(3) キリスト教と仏教

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子) / はなおか・えいこ
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor Theologie)の学位を取得。'87年師家(しげ)の印可証を授与され、女性の老師となる。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシヤ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化科学研究科教授として哲学、宗教学を教える。著書は『宗教学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教学』(新泉出版社、'94)、『禅と宗教学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新泉出版社、'88)他多数。

1. 精神的な面で生い立ちの記

幼い時から「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」という言葉をよく聞いてきた。医師の祖父が儒教的な生活を送っていたからである。『修身齊家治國平天下』と説く儒教の教えは、先ず生活の全ての基礎を、道に従って身を修めて生きることには置いているからである。「道とは何か」と、自らの終わりになる頃から真剣に考えるようになった。特に、中学の日本史の先生のある日の芭蕉についての授業から、「無能無芸にただこの一筋に繋がる」と言って、俳諧の道に一生生きることになる芭蕉の生き方にこの上ない共感を覚えた。また高校での、漢文や国語選択の古文の時間はこの世の雑事を全て忘れる程に楽しかった。それでも、「道」が何であるかと、中学の心には未だ直観的にもピンとはこなかった。正にどうして生きて行ったらよいのか全く分らなかった。

その頃は未だ幼かった弟妹の世話や、国立の研究所の責任者として研究に専念する父とそこで研究する沢山の若い研究員の方々への心配りで、家族の世話どころではない母への手回しを途中で止めて、一人京都へ出て行く申し訳なき心を痛めながらも、両親に何と京都に勉強をしてみたいと、それどころではないその頃の家庭の経済事情をも顧みず願ひ出たのであった。その頃は、丁度父が東大の農学部の大学院の兼任教授で東京に単身赴任をしながらの広島の研究所の勤務でもあった。それで本当は東大に合格できれば経済的には大変好都合であった。しかし、受験勉強どころではなかった家庭の事情や広島の教育のレベルの低さもあって、東大受験には二度とも見事に不合格で、自宅で弟妹の家庭教師をしながら浪人をしたり、浪人の二年目には両親からの許可を得て後半の数月のみ京都の予備校に入ってもした。そしてその京都の町の素晴らしいすっきり魅せられてしまった。下宿は相国寺の直ぐ近くで毎朝相国寺で散歩ができた(20年後にはこのお寺で参禅することになる)。また京都では、祖父や伯父がその昔京大の医学部の学生として医学を勉強していた何となく懐かしい町であった。更に、是非大学で指導を受けたいと願ひ続けていた西谷啓治先生が、東大の先生とも思っていたのは私の誤解で、京大の先生であった。京大に入学して

からこの思い違いに気づいた時は、正に天にも昇る思いがした。

一生を振り返って見た時、高校を出てから大学入学までの浪人時代に思い切り、数々の偉人伝や自伝、ドストエフスキーやトルストイ等々のロシア文学、ゲーテやロマン・ローラン、ヘミングウェイ等々の欧米文学、また日本の古代の謡文学や夏目漱石、森鴎外、武者小路実篤、横光利一、松尾芭蕉等の日頃からずっと読みたいと思っていた小説類や紀行文等々を読書できたことは、正に天からの恵みであった。その頃は、当然のことながら将来どのような人生を過ごす事になるかは全く分らなかった。しかし、今振り返って見ると、この二年足らずの間、家事を手伝い、図書館に通いながらとはいえ、自由に両親宅で読書させて貰った事は、私の人生に不可欠の大切な一時であったことが分かる。

大学に入学して直ぐに、生きる道を求めるべく、先ず聖書研究会とマルクス・レーニン研究会に入部した。しかし、間もなく、私にはマルクス・レーニン思想ではとても生きて行けないことが分かった。後者の研究会の講師は、京大の経済学部出身で、しかも浄土真宗にも生きようとする。人生に対して大変真摯に立ち向かっている方であった。しかし、研究会で毎週読書したマルクスとレーニン著の翻訳本の「ドイツ・イデオロギー」は、私には余りにも人間的に貧しく思われた。それよりも、聖書の方が逆に、心豊かに思われた。

2. 大文字山までの「静思の時」

西谷啓治先生のご指導を受けたいと願ってはいたものの、一体仏教にどの様に近づき、そしてそれを学び初めたら良いのがずら分らなかった。また、戦後の事もあり、子供4人を育てるには余りにも苦しい生活の中から私の大学の費用を出してくれる両親の苦勞を思うと、下宿や大学図書館でじっとしていることも憚られた。それで、仏教は若し命長らえることができた後から深く学ぶこととして、大学の仏教関係の長尾雅人教授の授業だけに限定し、大学の授業の他にも、道を求めるために、キリスト教の教会に通い始めた。大学でのキリスト教の研究会主催の修養会にも夏休みや春休みや冬休みにも出かけた。あるお休みの4、5日間の修養会の折

りに、毎朝大文字山の中腹迄出かけて、朝の4、5時から1-2時間「静思の時」が持たれた。この修養会は、京大の聖書研究会の講師であるオーストラリアのお若い宣教師のご夫婦が、大学のお休みの時には北白川の丘の上の素敵なご自宅を、京都の諸大学のキリスト教の求道者のために解放して、寝食を共にし、聖書研究をし、議論をし、讃美歌を共に歌うことを毎年、無私の精神で開催して下さっていたものである。

何回目の修養会であったか、未だ天には星の輝いている草むらの中静かに座る辺りでは、ススキが風に微かな風にもよいていたので、2回生の秋の、筆者には2回目の大文字山での修養会でのことであつたと思う。全く不思議な経験をした。その頃は、未だキリスト教のみならず、仏教やまた禅の語録の内容にも無知であった。しかし、今振り返ってみると、禅語録の中のある有名な「天地と我と同根、万物と我と一体」にしてしかも「天上天下唯我独尊」という自己と万物の一体にして、しかも同時に自己の独立自存の経験が訪れた。その当時は、この経験を表現する言葉は到底見つからなかった。その当時は、これこそキリスト教の神経験であると理解された。しかし、例えば、パウロは、Gal.2.20で「我生けるにあらずして、キリスト我が内に生きるなり」と言っているが、筆者にとつてはこの経験は、「我生けるにあらずして、神我が内に生きるなり」というが如き経験であった。しかもその神は人格的な意欲的な神ではなく、現在の著者の言葉で言えば、「絶対の無限の開け」としての神である。この経験は、筆者の中でそれ以来ずっと生き続けていた。その時から20年程たってから、夫の世界をきっかけに禅の修行を始めた。座らなければ、理屈抜き



1972年4月、ハンブルクのアルスター湖畔にて。
向かって左が西谷啓治先生。
中央は、スカンディナヴィア半島から駆け付けた西谷哲学
研究者。右は筆者。



1972年4月、ハンブルク空港にて。
向かって左が西谷啓治先生。
中央が、リース・グレーニング夫人。右が筆者。

に文字通り生きて行けなかったからである。しかし、1960年の大文字山でのこの経験は、現在の筆者にとっては、キリスト教の神の経験や仏教的な、あるいは禅宗派的な経験であるのみならず、宗教的な原体験であると理解している。何故ならば、筆者の宗教的な生の原点は、正確にはそこにあると筆者において理解されるからである。この事は、その経験後20年程経ってからの禅の修行における禅寺での参禅における経験からも明らかに言えるのである。

この宗教的な原体験は、キリスト教や仏教のみならず、ある当該の宗教に属する為に、民族、国家、職業、階級、性別等々を問わない世界宗教(あるいは普遍宗教)と呼ばれる、命を賭けて生きることを中心とする道としてのすべての宗教に妥当すると理解されるのである。筆者には、宗教的な経験とよばれうるもう一つの不思議な経験がある。これも、既成の宗教の内部での経験というよりは、もっと遥に一般的ないしは根源的な経験である。特殊な経験というよりは、日常茶飯事的な経験、日々はれ好ましいな経験である。そして、これこそ、すべての領域に共通する宗教的経験であると理解されるものであると思っている。何故なら、宗教とは、西田幾多郎も語る如く、心霊上の事実だからである。

筆者は音楽が大好きである。特にバッハやモーツァルトやベートーベンの宗教音楽が大好きである。亡くなった夫は、ベートーベンの曲が好きだったが、ギリシャ神話のある物語との関係で、筆者と共通して好きな曲にパッヘルベルのカノンとジークがあった。夫の生前、この曲を何回となくギリシャ神話の話をしなが二人で一緒に聞いた為か、夫の他界後この音楽が涙無しには聞けなくなってしまっていた。それで何回となく、全身から涙という涙がすべて枯れてしまう程にこの音楽を毎日暇さえあれば聞いていた。こうして、この音楽を一人で一体何百回聞いたことであろうか。そうしているうちに、ある日、不思議なことが起こったのである。突然、夫の生前の思い出とそれに纏わる悲しみとその音楽の表しているギリシャ神話の悲しさとの両方の悲しみのどん底から、その音楽が生まれてきた当時の農民たちの姿を始め、それを取り囲む田園風景が明るい太陽光線の中でありありと

眼前に開けてきたのである。つまり、音楽においては、それが本当にその音楽に成りきって聞かれる時には、聞く者の感情や意思の領域は越えられ、更にその音楽が表している世界も越えられ、その音楽が成り立っている根本の世界が聞く者の心に露わになることが、分かったのである。この事は、音楽のみに当て嵌まるのではなく、すべてのことに当て嵌まると思っ

一般的には、数珠とかロザリオでは、その玉は個人を、その紐は人類の立場を表していると理解されている。(筆者は更に、玉にある穴は、国家とか民族のような種の立場を表している)と理解している)が、ここでは、玉を各々の科学と、また紐はすべての科学に通底している普遍の立場、ないしは絶対の無限の開けと理解されるならば(この場合には、玉の穴は各科学を系統的に分類した時の種の段階を表すことになる)、次のように語られ得る。つまり、どんな学問でも、またどんな生活領域でも、一つの学問ないしは一つの生活領域(数珠やロザリオで言えば、一つの玉)が究められるならば、遂には、すべての学問に開けている普遍の立場、ないしは絶対の無限の開け(数珠やロザリオではすべての玉を貫き通す紐)が開かれてくると。

同じことを宗教で語るならば、個々の宗教には、それが真に人間の個の心の琴線に触れ得るものであるならば、普遍の立場、絶対の無限の立場が開けていると言える。従って、キリスト教と仏教にも、その成立の時代や背景や創始者等々の相違はあれ、両宗教の根本には当然、通底する開けが開けている。この事実は、筆者には、大文字山の静思の時の宗教的原体験と夫の他界後の座禅の修行において初めて自覚的に開かれることとなる。

3. キリスト教と仏教に通底するもの

筆者の恩師である西谷先生は、「成りつつ成った仏教徒にして、同時に成りつつあるキリスト者」であると自称された。筆者も生涯「成りつつあるキリスト者にして、同時に成りつつある仏教者」でありたいと願っている。筆者の宗教的経験は、如何なる実体的な枠組みをも置かない「開け」の、しかも「絶対の無限の開け」の経験である。この開けは、人格神のキリスト教の神

として経験され、表現され、また仏教の縁起として成り立っている仏として、あるいは無実体的な無ないしは絶対無として、経験され、表現されることもある。しかし、これらの経験や表現のいづれにおいても、自己否定的なあり方と自己肯定的なあり方とが同時に成り立っている。人格的で祈りの対象となるキリスト教の神も、「己れを空しくして僕の形」(ピリピ2、7)をとり、人間の姿になった自己空化、自己否定の神でもある。筆者の言う「絶対の無限の開け」における「絶対」という言葉も、天地や万物の自己否定と同時に人間の個の自己否定とを意味している。天地も万物も自己を空しくしてこそ人間の個と一体、平等でありうるし、その逆もまた真であるからである。また「無限」は、その自己空化が止まることを知らぬ無限のものであることを意味する。筆者は、以上のように、両宗教に通底するものを「絶対の無限の開け」と理解している。

P. G. I. 統合のお知らせ

このたび、東京都都市計画「環状2号線」に伴う区画整理のため、2000年3月末日をもちまして虎ノ門のギャラリーを閉館し、芝浦に統合いたしました。4月より業務は芝浦にて、引き続きこれまで通りにギャラリー及び用品ショップを営業しておりますのでよろしくお願ひ申し上げます。

フォト・ギャラリー・インターナショナルは1979年4月にオープンして以来、「P. G. I.」の名称で多くの皆様から親しまれ、ご愛顧いただいております。誠に残念ではありますが、満21年目を迎えたこの年に虎ノ門での営業は終了させていただきます。芝浦に移りまして、創設のポリシーを忘れず、なお一層企画展の充実にも努めたいと存じますので、今後ともご支援、ご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。